



はじめに

「書道塾taneのすみあそびワークショップ」は、全国どこにでも荷物を担いで移動している。とはいっても、宮城県内がほとんどで、これまでには東京、山形などにちょこっと。「教えない書道」「誰でも調子に乗れる書道」などとは言ってもイメージが掴めない。「書道」というのがちょっと抵抗があるのかもしれないな、と思い、結局のところはまず「あそび」なのだということで、「すみあそびワークショップ」という形で落ち着いた。ワークショップなので、指導者がいるのではない。そこにいるのはファシリテーターであるから、自分のことを「書道ファシリテーター」と言うことにした。あそびの場における、ファシリテーターの役割も含めて、この場で何が起きているのかを、考察してみることにする。

あそび足りない！

新しい道具を見たときに、人はどういう反応をするのか。「さあ、自由にやってみていいですよ」という声掛けに、本気で自由になれる人は本当にごくわずかである。もちろん、こだわりが強かったり、見通しが立たないと不安になるという特性の持ち主に対してはある程度、レクチャーやルールが必要だからそれが前提ではある。しかし、いわゆる「おとな」で、文字も書ける、習字体験のある人にとって、筆を目の前にして「さあ、自由に！」が最もハードルが高い。書道塾taneの展示を見に来た人たちは、口々に言う。「ああ、のびのびとして、自由でいいですね！」。それなのに、自分がいざ筆を持ってみると、どうもそれができない。

特別支援学校には「遊びの指導」という授業がある。学生時代に学んだときはその言葉に違和感を覚えた。遊びはそもそも自発的なものなのに、なぜ指導なのだろう、と。熱心な学生だった私は、その中で「遊び方」を教えることはもちろんだが、本人にとってそれが遊びなのかどうかを、よく見極めたり、そこに少しのきっかけを与えることで本人の自発的な行為が増えていく、というようなことを学んだ。当時はまだなじみの少ない言葉だった「ファシリテーション」という言葉も、そのときに出会った。本人がまず何をしたいのかを見つめる、そしてそれが円滑に、あるいは本人の望んだ方向性に向かったり、さらにはもっと楽しさを導くような、かかわり。そこで出会う「ひと」と「もの、こと」の重要性について、自分のテーマとして大事にしてきた。ところが、やはり問題なのは「おとな」である。遊び方を知らない。知らなければ知らないでいい

のだが、知らないのに教えようとするから大変である。固定化された遊び、子どもが遊ぼうとすると、止めてしまうという現象がさまざまなところで見られる。遊び足りないのは「おとな」である。だから、「さあ、自由に！」ができないのだ。

あそび切る！

「すみあそび」の現場では、やりたいことをやりきってもらう。たとえば初めて墨をみた子どもは、その真っ黒い墨液そのものに関心を持つ。「わあ、まっくろ！」と叫ぶ。筆は、「ふわふわだ！」と言ってそのまま触る。この段階での道具との出会いが本当に大事だ。ふわふわしている、動物の毛なのかな、これで書くのか、黒いのつけたらどうなるの、頭の中にはそういう疑問で溢れている。世界との出会いの瞬間。「驚き」や「感動」で埋め尽くされているときに脳は最も柔軟に、創造力を掻き立てられている。もう頭の中は、「やってみたい！！」に支配されているのだ。だからこそ、その瞬間にやってみたいことを実現してもらう。待ったなしである。啐啄。ここで「やりたい」と思ったことを自分で実現することは、「やりたい放題させる」ということとは違う。たとえば学校の習字の時間には決してできないような、「手と足形をとる」という子どもたちが大好きなあれ。「やってみたい！」と言ったら、そのためにいそいそと用具を準備し、こちらがもうそれはそれは壮大な思いつきだね！これをやりたいなんて最高じゃん！と一緒にワクワクしながら手伝う。「わあ、冷たい」「ちょっと気持ちいい」「まっくろだ」と自由な言葉を聞きながら、大事な拓本でもとるかのよう丁寧と一緒に手形を取る。「最高の作品だね！」と言葉をかける。あの達成感のある笑顔が最高だ。そのあと待っている「手と足を洗う」という作業が、その達成感で満たされた子どもたちは苦しめない。「ああ、楽しかった」という余韻の中でせっせと自分の手足をきれいにしていく。さらには、後片付けや、あいさつまでもが、丁寧になっていくのだ。もはや、何かの儀式のような、静けさのある、それでいてのびのびとした自由な遊び。こうしてあそび切った子どもたちは、どんどん自分の好きなことに夢中になっていく。

おとなのあそび場の重要性

大人こそ「遊びの指導」が必要かもしれない。そう思うようになって始めたのが「OTONA書道」の時間であるが、実は指導など必要はなかった。書道塾taneの特徴である、多様な人が集うという場は、そもそも他者の枠組みを外す遊びの要素がたくさん含まれている。つまり、障害があったり、年齢が違ったり、興味関心が違ったりすることが、他者にとっては重要な刺激となり、「こんなことをやっているんだ」「つぎはそれをやってみよう」という、書を通した双方向のコミュニケーションが成り立つ。大人は「何を書いたの？」と問いがちだが、自由な彼らとともに書いているうちに「書く」という行為そのものを楽しんでいる自分に気がつく。書家の石川九楊は「誰も文字など書いてはいない」（二玄社）という本の中で、「書きぶりを書く」と表現している。私たちが本来持っている「書く」ことへの欲求に、さらに注目してすみあそびを展開していきたい。

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、 「旅する書道塾tane」も開催中。<http://ikuko-sakurai.com>